

チーターもアルツハイマー病

ヒトに特有の病気とされるアルツハイマー病によく似た症状が、チーターでも起きることが麻布大の調査でわかった。遺伝子操作した動物以外で見つかったのは初めて。24日に宮崎市で開かれる日本獣医病理学会で発表する。

宇根有美・麻布大准教授らの研究グループは、02年以降に国内の動物園で死亡した、10カ月から19歳までの22頭のチーターの脳を調べた。

その結果、ヒトのアルツハイマー病で見られる①大脳の萎縮②神経細胞の外に蓄積する脳のシミ③神経細胞内の糸状の

ヒト以外で初確認

たんばく質の蓄積物、の3条件をすべて満たす個体が2頭いた。

この2頭は生前、出入り口に頻繁にぶつかる、えさを認識できない、失禁するといった「認知障害」とみられる症状が現れていた。

アルツハイマー病は、ヒト以外では同じ症状が起きず、動物実験ができないことが研究を難しくしている。高島明彦・理化学研究所アルツハイマー病研究チームリーダーは「他の動物での発見や、ヒト以外での投薬試験の実現につながる可能性もあるのではないかと話している。